

県医活動報告

第19回男女共同参画フォーラム

日 時 令和7年5月17日(土) 13時

場 所 郡山ビューホテルアネックス

報告者 大分県医師会男女共同参画委員会委員

貞永 明美

メインテーマ 「ダイバーシティを踏まえたキャリア支援」

第19回男女共同参画フォーラム（日本医師会主催、福島県医師会担当）が、福島県郡山市内で開催された。

冒頭、松本日本医師会長及び石塚福島県医師会長の挨拶がなされ、基調講演に入った。

【基調講演Ⅰ】 「日本酒は故郷の誇り～福島市唯一の造り酒屋を守りたい～」

金水晶酒造株式会社四代目蔵元・取締役会長 斎藤 美幸

造り酒屋の一人娘だが、蔵を継ぐ気は無く、大学卒業後にテレビ業界（フジテレビ）に就職。激務の中、結婚・出産（記者としての初めての旧性使用と育休取得）があった。長男は実家の家族に預け、復職。東京・福島の二重生活後、第2子育休明けと夫の単身赴任が重なり、系列の福島テレビ（ドキュメンタリー番組の制作でギャラクシー賞優秀賞受賞）へ異動し、第3子育休明けに夫の海外勤務が決定した。その後、テレビ局を退社とともに、M字型カーブの谷に落ち、「子育ては女性の仕事」というアンコンシャス・バイアスにとらわれた旨のキャリア中断に関するエピソードを話された。

帰国後は専業主婦になり、東日本大震災を契機に、市内唯一の酒蔵を守るため、福島に戻り、蔵元に就任。各種コンテストなど、賞を獲得。2022年の福島県沖地震で蔵が全壊したことを機に、高齢者や女性の働きやすい酒蔵に立て直し、高品質・少量生産の日本酒造りに舵を切ったことを紹介。

福島県から女性（特に若い女性）の県外流失が続いており、地域の状況に合わせた「アフターマティブ・アクション」が必要との認識を示した。

若い人は将来を年長者に見る。年長の女性を大切にされてないところでは、若い女性は安心して年を取れず、まだマシなところに移住するだろう。男女共同参画が理想だが、若い女性を優先にしないと間に合わない時代になったと話された。

【基調講演Ⅱ】 「女性医師のキャリア形成に壁はあるか」

藤田医科大学ばんだね病院脳神経外科 教授 加藤 庸子

医師であった父親の影響で医学の道へ進み、愛知医科大医学部の一回生として入学。卒業後は脳外科医として勤務し、「世界脳神経外科連盟」で活動する経験を得ることができ、世界を見る目、

外部から日本を見る目が養われた。

ばんだね病院は、複数の留学生が在籍。途上国の医師の受け入れを積極的に行い、性別・年齢のバイアスにとらわれず、能力に応じて適切なポジションに就いて、後進のロールモデルになる女性医師も増加している。

M字カーブ（出産・子育て）が離職の2大要因となるが、タスクシェア（特定行為研修制度・臨床看護師）・タスクシフト（複数主治医・地域医療体制）などで乗り越えている。また、診療看護師は働き方改革の救世主となるとの話もあった。

ダイバーシティの促進は誰もが自分らしく働き、ストレスの軽減や生産性向上につながる。イノベーションを生むのは、男女を含めたDEI（D…多様性と包括性：E…平等性：I…イノベーション）であり、キャリア成長と発展のために女性のロールモデルの増加、サポートネットワークづくり、新たな研究が大切であると話された。

報告1：日本医師会男女共同参画委員会 委員長 小泉 ひろみ

令和6年11月29日の第1回日本医師会男女共同参画委員会にて松本日本医師会長から受けた、「男女ともに活躍できる医療界を目指して」の諮問に対して7回の委員会を開催し、協議を行う。今期、本委員会が関わる調査は「勤務医会員数、勤務医部会設立状況等調査」、「女性医師の勤務環境の現況に関する調査」、「男女共同参画についての男性医師の意識調査」の3つがあり、男女共同参画についての男性医師の意識調査は前回調査より10年が経過しており、どのように変化したかを明らかにし活用すると話された。

報告2：日本医師会女性医師支援センター事業 日本医師会常任理事 松岡 かおり

日本医師会女性医師支援センターは「女性医師バンク事業」、「再就業講習会事業」の二本柱を軸に展開していることを紹介。厚生労働省の「医師偏在の是正に向けた総合的な対策パッケージ」の提示を受け、公募の結果、日本医師会が全国的なマッチング機能支援実施事業者として選定されたことを報告。

今後は中堅、シニア世代医師のマッチングや、リカレント教育に関する支援を提供していく予定と話された。

【シンポジウム】

1. 「福島県が取り組む地域医療と若手医師のキャリア支援」

福島県保健福祉部医療人材対策室長 新妻 崇永

行政より、福島県の医療の現状について報告。人口は170万人でピーク時より40万人減少している。

・福島県の医療の現状

①6つの医療圏で構成されている。

②人口10万人に対する県内医師数は全国的に見て少ない。

③就学資金貸与制度や、ドクターバンクふくしまの創設。

ふくしま子ども・女性医療支援センターによる医師招聘等、医師確保の取り組みを進めていることを紹介。

2. 「チーム医療はチーム育児へ」～同じ診療科で働く夫婦医師が共に育児休暇を取得した病院の取り組みと新制度の活用の意義～

社会医療法人養生会かしま病院 診療部部長 中山 文枝

自身の経験を基に、男性医師にも積極的に育児休暇を取得して欲しいと発表。

自身の育児休暇の経験は医師としてのキャリア形成に役立つ実感、家庭生活だけでなく、地域社会との深い関係性の構築につながるものであり、男性医師にも実感して欲しいと後押しを続けていると話された。

医療DXを利用して在宅ワークを導入し、自宅で電子カルテを見れるPCを院内より貸し出し、患者や後輩医師の指導、診療では午前の外来、訪問診療、救急当番のみの担当とするなどの工夫をした。

また、育休の当事者でもあった夫の体験談として、3人のこどもの個性や成長のスピードの違いを感じ、個人に合わせたサポートの重要性、子どものスキンケア、食事管理、予防接種など多職種の理解への大切さを実感し、地域のニーズや行政との連携を学んだ。

医療DXの普及により、将来的には在宅勤務も併用しながら夫婦で育児を楽しむことが可能になると感じたことを述懐するとともに、院内パパ育休の認識が広まり、職場環境にも良い影響がもたらされた旨を報告。

3. 「人生の終わりに『ありがとう！幸せでした！』と想い合える生き方を探して」

～5人の子供と男性育休、地方（福島）移住で得た宝もの～

大原総合病院脳神経外科部長 岩楯 兼尚

脳神経外科医としてのキャリアの中で経験した、結婚・子育てや家庭崩壊の危機、または男性育休取得を通じて得た「価値観の変化」について「キャリアとは人生そのもの」ととらえ、ワークライフバランスを考慮して家族と福島に移住したエピソードを紹介し、自身の育休取得、授乳以外のすべての育児に関する事に主体的に携わった経験について話された。

現在の医学生に関心事もワークライフバランスに関するものであるというアンケート結果の他、育休により育児を通じて子ども達の成長を直に感じられることなど、初めて得られる視点があり、それが臨床の場で生きたと話された。

【総合討論】

担い手の少ない診療科の専門医取得を目指す地域卒の学生への支援・医師不足の地方の医療機関における地域単位での協力体制の重要性・日本医師会として男性育休を取りやすい環境作りの推進などの話がなされた。